おおとり会だより

平成14年4月20日発行
静岡女子短期大学
静岡女子大学
同窓会　おおとり会

―開学15周年の年に―

静岡県立大学はばたき寄金運営委員会
委員長（学生部長）木村良平

春爛漫の季節を迎え、おおとり会会員の皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。日ごろ、貴会の本学へのご支援・ご協力に対しまして厚くお礼申し上げます。

さて、静岡県立大学は、昭和62年4月、静岡薬科大学、静岡女子大学、静岡女子短期大学の県立3大学を改組統合し開学して以来、平成13年度には創立15周年を迎えました。この間、部局の整備を進め、現在は、国際関係学部、経営情報学部、薬学部、食品栄養科学部、看護学部、医療・福祉系の短期大学部、環境科学研究所というように国際化、情報化、高齢化、地球規模の環境問題などの21世紀における最重要課題を展望しつつ、新しい時代を支える有為な人材を育成する総合大学へと発展してまいりました。

この創立15周年を記念して本学では、昨年度、年間を通して、学術フォーラムや学生主催による様々なイベントを実施して、本学の教育研究あるいは学生活動について学内外に情報発信してまいりました。

この企画イベントには、本学では、平成9年度の創立10周年事業を機に、本学の一層の発展を目指すことを目的として創設しました「はばたき寄金」も参加協力しました。

「はばたき寄金」は、これまでに成績優秀卒業生の表彰、海外で開催される学会において優れた発表を行った大学院生、国内外のスポーツ大会で優秀な成績を収めた学生、あるいは国際的なボランティア活動に積極的に取り組んだ学生等を表彰する報奨事業や、海外の交流大学との学生の相互交換学生に対する奨学金支給事業、学生主催による全学的なシンポジウムや教員による国際的な研究集会などの開催経費の助成事業などを実施してまいりました。

創立15周年記念事業に、寄金では、「学生スピーチコンテスト」「学生文芸コンクール」を行うとともに、助成事業として明日の夢を語る会による「やあ先輩！ 21世紀の夢とロマンを語ろう」、看護学部生が中心になって行った「学生運動会」に対して事業費の助成を行いました。

貴会からこの15周年記念イベントにご理解をいただき平成12年度・平成13年度の2ヵ年にわたりご寄附いただきました総額10万円は、これらの事業費の一部に充てさせていただきました。書面を借りましてお礼申し上げます。

また、貴会からの毎年3万円の寄附金のお申し出に対しましては、はばたき寄金運営委員会で検討した結果、毎年度、学生を対象に年間を通じて優秀な成績を収めた、あるいは顕著な活動を行った個人・団体に「おおとり会賞」を贈呈することとしました。

この賞の記念すべき第1回受賞者は、現在選考中ですが、日を改めて皆様にご報告申し上げたいと思います。なお、第1回「おおとり会賞」は、開学記念日（4月26日）に行う「はばたきの集い」において表彰することとしました。

最後に、引き続き本寄金に対しましてご支援をお願いいたしますとともに、貴会の益々のご発展を祈念いたします。

会員の皆様へ

おおとり会会長　牛木琴

今年は年始めから暖かな日が続き予想はされていたのですが、如何にも早い桜の開花でした。お花見の日程をたてるのに西行の心もかくやと心急ぐ思いをしましたが、今は日本平丘陵県大への並木道はすっかり欅の緑に覆われて、爽やかな風が吹き抜けております。

日頃から会員の皆様のお寄せ下さる思いを有難く受け止め役員一同運営を計っております。以前にも報告したと思いますが、毎週火曜日各科当番制で大学内にある同窓会室の管理に当たっています。桜の季節は殊の外大学裏山と、県立美術館・図書館周囲の桜が見事です。鑑賞し乍ら一度同窓会室を訪ねて下さい。又、旧薬大の同窓会薬友会室が並んでいて、こちらは専任の係がいて管理をしているとの事です。大学内に同窓会室を確保している事でもあり、何らかの形で県立大学のお役に立てたらの願いと、おおとり会の名を印す事ができたらとの思いで奨励賞をと申し出て、決定致しました。一応、十年目処で毎年一人（又は一組）の予定です。昨年の会報の中でお願い致しましたところ、別紙報告の通り、三百余名の方から寄金がありました。今後もご協力を得て拡大して参りたいと思っております。（有難うございました。）

新世紀二〇〇一年の幕開けは九月十一日ニューヨークで起った出来事により、まことに衝撃的なものとなりました。そして、その後に繋る事件は世界が変わると云う事を多くの人に感じさせるものでした。諸々の事は、一国一地域でなく、地球規模で捕える必要性を感じ『グローバル』を今回〝おおとり会だより〟のテーマに致しました。女子大最後の卒業生を送り出してから十余年、一番若い同窓生も社会でボツボツ中堅処に仲間入り。皆様各々の立場で考える事、実感する事多々あると思います。どうぞ、同窓会にお心をお寄せ下さると共に、皆様の情報と原稿をお寄せ下さいますようお待ちしております。

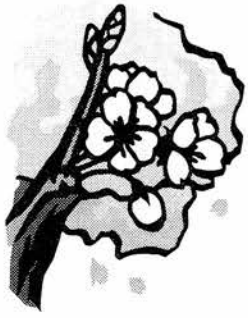
春宵に想う

静岡県立大学大学院国際関係学研究科
教授　立田洋司

今年のおぼろ月夜は、三寒四温の中でというよりも、妙になまぬるく泥臭い世相の中で見た気がする。とはいうものの、歳月の経過を郷愁めいた感情が染めているような卒業式日和の中では、教え子や「おおとり会」の知人の姿もふと思い出される。折から今日も、卒業生が私の研究室にたずねて来てくれた。仕事をやめたという報告だった。この種の報告は最近目立つようになった。同時に、私自身もこの頃やや年を取ったかなと感じることも増えた。尤も、人生五十余年も生きてくれば知識や経験が頭を妙に重くもすれば、浮世の垢も蓄積するし疲れもたまる。何せ今のイスラエルよりも私の方が年上なのだから……。とくにここ数年は、希望という希望が憂鬱菌に犯されてしまいそうな状況。女房殿は「憂鬱になるくらいの暇があれば、原稿でも書いたらどーお」などと宣われるが、近ごろの世相には、自身の脳細胞制御力も遠く及ばない。—脱税や所得税隠しを孕んだカネの世の中、国債という名の妖怪、呆れた食品問題、監禁事件や虐待の報道、それにあの議員たちの不徳や疑惑の数々。どう見ても立派には見えない彼らの間抜け顔に、物欲、金欲、支配欲、名誉欲がへばりついた低俗さ。どうやら彼らは、自分の故郷でさえ集票や物欲の対象にしか見えないらしい。あまりの情けなさに、腹が立つよりも空しさが押し寄せる……。かたや、人間存在や国際外交の本質に関わる北朝鮮の拉致事件。いったい人間の命とは何なのか。それにまた、あの泥沼化したイスラエル、パレスティナ……。流血の応酬の先に見えているものは何なのだろうか。この難解な問題は、アフガン事情の底辺とも絡んで、民族、国家間の亀裂が膿みを孕んできていることをも示唆している。膿みを孕んだものは、膿みを吐き出し尽くさない限り、元には戻らない。しかし、人間の歴史の場合はさらに厄介で、膿みを出し尽くしても、元どおりになった例はまず無い。即ち、膿みが吐き出されて行く過程で、民族や国家（地域）はあるいはしぼみ、あるいは崩壊し、あるいは全く諸相が変わってしまうのである。

憎しみや羨望が人間個人の枠範囲を超えると、血（血統、民族）の争いと化す。これは、いわゆるdevelop（発展）にも負の意味が存在することの証であり、一般的な発展的文明史観に対する警鐘ともなるものだが、エジプトの滅亡やギリシャ世界の分解、ローマの崩壊も決してこのことと無縁ではなかった。また、キリスト教徒も十字軍以後ユダヤ教徒を迫害したし、キリスト教世界も激しい内部抗争を繰り返した時代があった。記憶に新しい二十世紀の半ば以降でも、米ソの対立から国連軍や中国義勇軍を巻き込んだ朝鮮戦争（一九五〇～一九五三）が起こったし、東地中海のキュプロス島では、ギリシャ系とトルコ系民族との間で世界大戦にも発展しかねない戦闘（一九七四）があった。その後キュプロス島を訪れた私の網膜には、銃痕も生生しいゴースト・タウンの映像がこびりついている。またさらに最近にも、イラン・イラク戦争や旧ユーゴスラビアの民族間悲劇などが繰り返され、それらに介入して来たアメリカに、昨年九月十一日にあの事件が勃発した。—あの日以来、世界は変わった、と私は思う。というのも、文明社会に囲われている人間が、ほとんど何でも作り出せそうな幻影に酔っていた時に、そのような過信や慢心と引き換えに失われて行く大事なものを、あの人為的事件が思い起こさせたように思われるからだ。たとえば、「宇宙旅行は人類の夢」という標語に躍らされていた民衆が、人間自身の中（心身）にも宇宙が存在し、しかもそれが深遠な謎に包まれているということに気づき始めたように……。

—おそらくこうした折には人々は「故郷」という概念を思い起こすのだろう。この心の動きは、一種の回帰現象にも似て、強烈な指向性を示す。そして母なる大地に対する人類の歴史的追慕のごとく、発展、成長してきた自己に対して、逆説的にバランスを取り戻させようとする。一見すべてが進展するように見える世の中で、大切なものが逆にどんどん遠ざかって行くという意識の自覚。私たちは今、長年失い続けて来たものの中に、自分たちが回帰すべき場所が存在することに気づき始めているのではないかと思う。——「志を果たしていつの日にか帰らん、山は青き故郷、水は清き故郷」、「菜の花畑に入り日薄れ　見渡す山の端霞深し　春風そよ吹く空を見れば　夕月かかりて匂い淡し」。私の生年の翌年、イスラエル共和国誕生の前年（一九四七）に逝った希有な学者＝高野辰之の詩を強い郷愁とともに思い起こす今日この頃である。



「洪水の時代」の行方

美術家・静岡県立大学非常勤講師
赤地経夫

西暦21世紀の最初の年二〇〇一年が九月十一日ニューヨークで起こった出来事によって強烈な〈振動〉を与えられたことは、誰もが感じるところです。

一つのミレニウム（千年）が閉じ、未知のミレニウムへの幕開けの意識があっただけに、現代文明の象徴ともいえる都市の、双子の巨大な高層ビルが一瞬にして瓦解する映像は、私たちが、日々生きる時代の空気や心のうちに焼きついた感さえあります。

その後のアフガニスタン空爆やパレスチナ紛争と連鎖していく事件は、他の土地で生じている紛争ともども、私たちがその一構成員である現代世界が歴史的に抱摂する文明の、多様で夥しいエレメントの一つの衝突です。

今、国の内外を問わず、吹き出る「暴力」と膨張・拡大する「憎悪」を目撃します。他方、経済と情報のグローバル化の結果、一層「敏感質」となった世界。旧来の秩序の崩壊と先の見えない中での模索。日々表出される光景が、新しい秩序形成のステップなのか、それともさらに激しい秩序クラッシュと混迷へのステップなのか分からない戸口に立っている、という覚えがあります。

私は、長い取材の中で、前述の出来事に関わる場を踏んで来ました。ニューヨーク、カブール、マザーリシャリフ、カンダハル、ペシャワル、エルサレム、ローマ、カイロ…。チグリス河の畔のバグダットのホテル滞在時には、イスラエル軍の連日の空爆から同宿の友人の部屋へ避難してきたレバノン人家族に会いました。印パ紛争で国境が閉ざされたカブールでの一ヵ月滞在の経験は、まだ西洋美術を学んでいた大学院生の時です。

歴史的現場は、いろいろな歴史的、民族的遺産と負荷を負った人々との出会いの場でもあります。

そうした経験から、私は次のように思います。

それは、異なる二つの極を同時に見つめる視力と知力を養うことです。自分の周辺や世界で起こる物事の中に、対立する二つの極を見いだして、極の核となる価値観・世界観の時空の旅をすることです。時空の旅とは、事件を時間の同一平面だけでは見ないということです。例えば、無数のエレメントの中から、民族の〈誇り〉を選んでみます。一人の烈しい信徒は、異教徒の軍が聖地の所在する母国に駐留することで〈誇り〉を汚されたとし、言語・宗教・帰属国を含めて多種の人々が活動する建物を、大勢の命を損なう目的で破壊しました。さらに、自分が属する集団の現況への絶望が、自らの死でもって敵対者を死傷するほど深いとき、死の怖れを克服しての実行は〈誇り〉として語られます。その信徒の行動には、アフガニスタンといういまだ近代的な国民国家を形成していない「部族社会」に入り込み、現代文明の利器を利用して、自らの憎悪を増発させる巧妙な戦略家の姿が見えます。他方、西部劇映画地のまま、問題を単純な「善悪二分化」し、圧倒的な軍事的プレゼンスと巧妙な情報処理を実行する、テキサス出身の米国大統領の姿が見えます。

話は変わりますが、スペインのコルドバを訪れると、閑静な旧市街に、ある彫像が建っているのに出会います。それは、12世紀コルドバ生まれのイスラムの哲学者、医学者イブン・ルシュド、ヨーロッパ名アベロエスの像です。かつてヨーロッパ社会を知性において圧倒したイスラム文明の証の一人です。前述した現代パレスチナ人の「絶望」は、イスラム教徒の〈歴史的誇り〉と交わることは、あり得ないのでしょうか。

身の回りでは、日本の伝統的美質といわれてきたものが変質し、社会の様々なフィールドでまるで虫食いだらけの古着のように、頼りにならない事態に直面しています。

明治維新以来、急拠欧米から移植した「近代」の仕組みや価値を、本来の骨格となるまで生育させることができたのでしょうか。「和魂洋才」にみる「建前と本音」という表裏活用論は、今の日本の混迷の原因の一つではないでしょうか。

遺伝子プールという言葉があります。あるエリアで文化を形成してきた民族集団の遺伝子の幅と多様性のことです。

世界の美と文明の現場のスケールとパワーバランスに触れ続けてきて、私は、島国日本が精緻に涵養してきた、「ミニマムなバランス感覚」の有効性に疑いを持ち続けていました。けれども、50才を過ぎて、繊細な「日常的バランス感覚＝呼吸法」は、有効な遺伝子プールに思えるのです。

まずは、大量消費社会の彷徨える集団的消費者から、近代的な個として脱することが必要です。すれば、例えばガーデニングの一木一草の移植に新鮮な生命の呼吸があるという細かな感覚の内にも、知力の涵養を見いだすことができます。

生活＝政治の中でグローバリゼーションをどう感じたらよいのか

被服学科（大学五回卒）
衆議院議員　大　島　令　子

昨年寄稿させていただいた時も、同窓の皆様のお顔を思い浮かべつつ懐かしさの中にいました。はや一年が経ち、今年もこうして「おおとり会だより」に寄稿できますことを大変うれしく思っております。心よりお礼申し上げます。

国会では衆議院「経済産業委員会」と「国会等の移転に関する特別委員会」に所属しています。この間国内問題だけではなく、環境・エネルギー・平和の問題など地球規模の課題をたくさん勉強させていただきました。

一九八九年十一月、ベルリンの壁が崩壊し、一九九一年十二月、ソ連の解体で「冷戦」は終わりました。アメリカは増大し、グローバリゼーションが進展していきました。企業は国境の枠を超え世界に進出しています。企業の意向が国を揺るがすところまで突き進んでいます。

一九九六年のアジア金融危機はその典型でした。嵐の中で立ち直った韓国やマレーシアは日本をしのぐ技術立国となりました。製品によっては製造国を気にする事はなくなってしまいました。中国では日本の商社が日本向けに特化した品を、安い労働力を背景に生産しています。暮らしの中で日常的に手にしている品の多くはグローバル化のなかでの競争に勝ったものです。

政府が発動した中国産農産品（ねぎ・しいたけ・畳表）に対するセーフガードは保護と自由化のはざまで大いに考えさせられました。

この様な中、ヨーロッパ諸国は民族と文化・国境の壁を越え、グローバル化した企業の母国であるアメリカへの富の集中に対処するため、共通の通貨（ユーロ）を生み出しました。「環境」の面では、エコロジーや脱原発への提起を続け、エネルギー消費を削減していく努力がなされています。

日本は高度成長期の右肩あがりのエネルギー政策を採っています。安定供給という理由で原子力に大きく依存しています。原発建設は、補助金効果と安全性の間で揺れ動きます。地元では「来てほしくない」という意志が大勢を占め、各地での住民投票でも住民の意思は国策に反した結果となっています。原発でのウランを燃やした後取り出せるのがプルトニウムであり、核拡散防止条約（注1）で国際的に規制されています。現在はプルサーマル計画（注2）の燃料ともされています。核兵器の材料でもあり、取り出せるエネルギーはウランの数十倍に達します。一グラムで数千～数万人の人を殺せる物資です。危険な核物質を地球の半周以上も運ばなければ成り立たないのが現在の日本の原子力に頼ったエネルギー政策です。輸送ルートの沿岸諸国にも影響を与え、パナマでは核を積んでいる船は運河を通さないとの法律案が発議されたほどです。日本だけでは解決できない大きな政策的課題です。原発に頼りきりになるのではなく、自然エネルギー（太陽や風力）をもっともっと取り入れるエネルギー政策を提案したいものです。EUでは自然エネルギー導入目標を二二％にする取り決めがなされました。

2000年に一緒に当選した女性議員と、
アジア保健に取り組むNGOを視察。
2001. 12. 11

米国でのテロは世界中の人々を震撼させました。日本は、その後の報復戦争で自衛隊を海外に派兵してしまいました。今後、国民の生活を「有事」を名目に統制してしまう法が登場してきます。日本の平和憲法は人類の目的を先取りした、世界に誇れる憲法です。派兵ではなく憲法の理念を世界に広めることが今必要だと思います。

地球温暖化問題では、二酸化炭素排出制限の国際的な取り決めである「京都議定書」からアメリカが離脱し、中国は加盟していません。両国が加盟しなければならないような世界中の共通ルールを経済や環境の面でも作り上げていく必要があります。私たちはこのかけがえのない地球を、次世代の子供たちにきれいなまま手渡す使命を持っているからです。

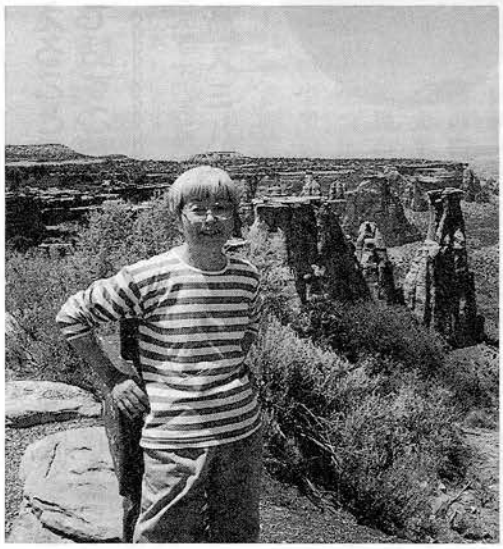
朝起きて顔を洗う水の安全性からはじまり、スーパーで購入する商品の一つ一つが既にグローバリゼーションという枠の中に組み込まれている現在、生活にしっかりと視点を置いた政治が求められています。これからも頑張る決意を述べ、寄稿とさせていただきます。

（注1）　核拡散防止条約：第二次大戦枢軸国である日本・ドイツ・イタリアに核兵器を持たせないための条約。一九七〇年発効。（略称NTP）同条約で核兵器の保有と開発が可能な国は米国・ロシア・イギリス・フランス・中国のみ。ところが一九九八年、NTP未加盟のインドとパキスタンが核実験を行い核保有を宣言した。同じく未加盟のイスラエルはそれ以前から核保有が確実視されている。

（注2）　プルサーマル計画：プルトニウムとウランを混合した燃料を通常の原子炉（軽水炉）で燃やす方式。ゆるやかな核爆発である原子炉で、より強いエネルギーを出してしまうプルトニウムを燃やすのは危険であると指摘されている。プルトニウム→ウラン→プルトニウムという構図を利用したタイプの原子炉が高速増殖炉。通常方式（軽水炉）より早くから研究されていたが、商業利用に成功した国はない。イギリスもフランスもアメリカも撤退した。

アメリカに暮らして、日本を観ると

英文学科（短大二回卒）　長田敏子



数日前、無事アメリカに戻りました。日本での滞在は長いようで短い四十日でした。

近頃は日本へしばしば帰っているので、カルチュラル・ショックなるものはあまり感じなかったのですが、今回は、いやもう驚きました。日本のマス・メディアの浸透ぶりにです。日本人の体と心とメディアがこれほどまでに把握しているとは知りませんでした。

同時多発テロ（アメリカでは単に〝九月十一日〟と呼んでいますが）はアメリカだけでなく世界を震憾させました。まだまだ起こるかも知れないテロ行為を恐れて、飛行機利用者は激減したと聞きます。その為、アメリカだけでなくヨーロッパでも航空会社は経営困難に陥ったという話です。それでも飛行機の乗客は徐々に増して、私が旅行中立ち寄ったいくつかの飛行場は旅客にあふれ、乗った飛行機もほとんど満席でした。それがどうでしょう。いつも人々で混雑している成田が、まるで空っぽではありませんか。私が日本にいる間、テロがこわいから外国旅行は取り止めたという話を何度聞いたことでしょうか。新聞には同時多発テロ記事専門のコラムがあり、ＮＨＫは毎晩アフガニスタンの戦況を克明に報道していました。アフガニスタン／アラブ紛争に、政治的にも地理的にも程遠い日本で、ブッシュ大統領が呼ぶところの〝アメリカの戦争〟に日本の報道陣がこれ程に熱を入れるとは。

同じことが去年の十一月にもありました。アメリカ大統領選挙が未曽有の大混乱に陥った時、私はたまたま日本におりました。ほとんど十一月いっぱい、その騒ぎが大体おさまるまで、テレビ・新聞は秒を競ってその成りゆきを報道しました。大統領選挙に大いに関心があった私は、その報道ぶりに感謝しながら、又、大いに驚きもしたものでした。

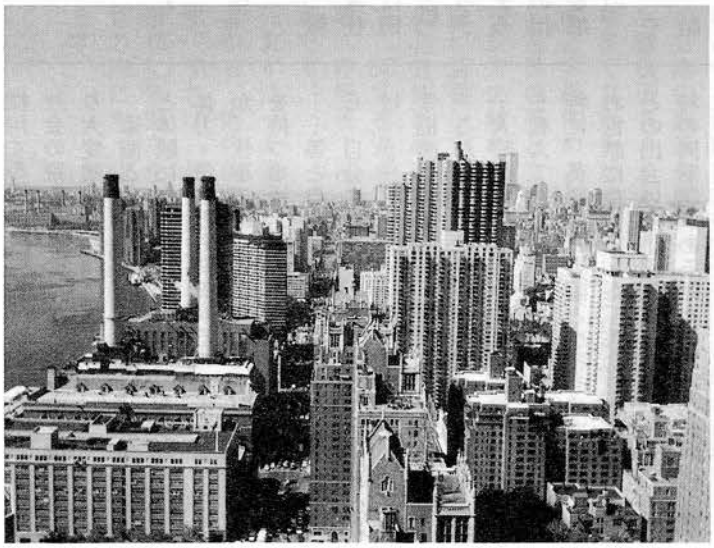
アメリカ大統領の影響は世界に及ぶとはいうものの、私が行くところ、この選挙をどう思うかと、何度人に聞かれたことでしょう。日本の首相についてたづねられたことはついぞありませんでしたよ。

身近なところでは、個人の健康管理についても似たような現象がみられました。特にテレビの健康に関する番組は、朝食と昼食の後、主婦たちがもっともテレビを見ている時間に上手に組み込まれています。これらの番組で発表される報告、例えば食物、運動、注意事項などなどは、大抵しろうとのパネルに一人の専門家がついてなされます。時々行われる〝実験〟は、ひどいときは一人、多くて数人が対象です。ですから、その結果は科学的にはほとんど価値がないにもかかわらず、医学的事実として発表されます。視聴者はそれをそのまま受け容れて実行に移すわけです。勿論、害になるようなことはあまりないでしょうが、私の知人の数人からあれはよい、これは何々にきくそうだと、同じ事を聞かされたとき、テレビの影響力の大きさに今更驚かされました。

テレビを見、新聞を読むのは、国内国外の状勢を知り、自己の生涯向上のために良いことに違いありません。ただもう少し、自分で考え、思考の自主性を重んじたらどうでしょうか。日本人はメディアに振り回されているように見えました。

日本帰国に際しての、私の印象をお知らせしました。〝他山の石〟としてお聞き下されば光栄です。

（二〇〇一年記）



＜プロフィール＞

長田敏子さんは、静岡ＣＩＥ図書館勤務の後、アイオワ州の大学都市ディビュークで、図書館司書として三十余年勤務、現在、アメリカの児童文学の翻訳、英語の教育法の勉強をしながら日米間を往復、悠々自適に暮らしておられます。

話すこと、考えること、そして考えて話すこと。

国文学科（大学十四回卒）
髙久三八子
アメリカ在住

一九八九年ニューヨークで、私のアメリカ生活が始まりました。当時、初めてアメリカで暮らすにあたり、或る日本人のご家族に大変お世話になりました。ご主人はその時ブルックリン・カレッジで物理を教えていらっしゃいました。その先生は日本で一度就職されたそうですが、アメリカで研究したいと一念発起し、日本で英語学校に通ってからアメリカに来られたそうです。

今でも印象に残っているのですが、当時先生が、「最近の学生は文章が書けなくなっているんだ。」と嘆いておられました。考えを文章でまとめることができないということらしいです。今はどうなのでしょうか。ますますその傾向が強くなっているのではないでしょうか。

ところで、私もアメリカで仕事がしたいと思い始め、英会話を独学で勉強しただけでアメリカに来てしまいました。来てしまってから苦労したのはもちろんで、最初の一年間は、夜仕事が終わってから、週に二回、自費で英語の個人レッスンを受けていました。学生の頃から英語が苦手で、大学時代も英語の単位を落とし、四年生になってから、大津山先生にご心配をおかけしましたが、その私が英語の国で何とかやってこれたのです。もちろん、いろいろな人に助けられながらですが。

今でもまだ英語は得意じゃないですが、ひとつ言える事は、大切なのは流暢に話すことではなくて、話の内容です。訛っていて聞きづらくても、中味が重要で、一語一句聞き漏らしたくないと思えば真剣に聞きますし、又その人とは何度でも話したいと思うでしょう。仕事の場ではまさにそうです。美しく話すことが必要な場も、もちろんあります。プレゼンテーションなどで、説得力が求められる場合とか。でもそれだって、中身が伴っての話です。まず必要なのは、中味を作り上げることでしょう。まずは自分の言語で、学び、考えて、表現できることが大切だと思います。そして他の言語が必要になれば、習得すればいいのです。

私が最初に暮らしたニューヨークは、ご存知のように様々な人種が暮らす街です。そして、人種の数以上に英語の訛りも存在しているかもしれません。最初にご紹介した先生も日本語訛りの英語でしたが、今もさらにご活躍なさっています。これからの時代は、ますます外国語が必要となってくるでしょうが、外国人のように話すことは必ずしも必要ではないと思います。国際化の時代にあっても、まずは自分の言葉で、考えて、話せる人が必要とされることに違いはありません。

❊日❊々❊雑❊感❊

英文学科（大学六回卒）
タケチ千鶴子
アメリカ・
オマハ在住

大学を卒業して早や二十数年経った。縁あって日系アメリカ人の家庭に嫁ぎ、永住であろう。言葉や文化は違っても人情は同じ。一男一女に恵まれ、只今子育て後半戦。

「アメリカに住む。」ってどんなだろうと思うであろうが、生活する事は、詰まる所日常があり、しがらみがあり、人との出会いがある。母国語でないもどかしさを感ずるのは、何年か経った今もかわらない。外国語を使える様に努力するしかなく、やがて外国語の中にいる事に平気になる。結局、度胸と慣れとも言いたくなる。

結婚生活は海外生活と違ったむつかしさがあった。嫁いだ家は日本の家父長制の残る家だった。古い体制の中には、人を思いやる温かい昔の日本があった。夫は政治家で選挙運動と社交に連れ廻された。その義父が最近亡くなった。一つの時代が終った。

社会にも出て見た。日本で教員をしていたので、同じ分野で挑戦してみた。日本にいる英米豪人英語教師は優遇されているのに、こちらでは外国人である私は平等扱い。やってみて挫折。外国語としての日本語熱もここ何年か強く、教育テレビの裏方もやってみた。プログラム自体が他の州に移り、これまた断念。時たま通訳もやってみたが観光地でもなく閑古鳥の感あり。仕事なら何でもいいと思い、こちらの高校中退者も採用する通信販売の注文取りもやってみた。社会の荒波もあったが、充実感と報酬もあり大変勉強になった。

家庭と仕事とのバランスは、自分の年齢と体験によって考え方が変わるものである。体力・気力とも関係するのではないだろうか。仕事であってもなくても、自分の世界を持つ事は、精神衛生と自尊心の為によい……等と自分で自分の現地点を確認しながら、自分に「おい、大丈夫か？」と語りかけ、「これでよし。」と励まし慰める毎日。幸福感と満足感が、訪れる日は、嬉しい。

こんな生活態度を築いてくれたのも、女子大時代の数多くの教授陣から学問の姿勢を教えていただいたからと感謝しています。特に、英語劇・卒論と小田幸雄研究室にはお世話になりました。英会話のムーア先生との出会いも小田先生の部屋でした。英文科の同窓誌「あるばとろす」の第一号、第二号と編集委員を務めました。題字は、とある書家（御存命なので御名前は伏せておきます。）の作品で「貴女が書いた事にしておきなさい。」と言われ、謝礼なしでした。その頃、静岡にいた何人かの同窓生と手作りの同窓誌を作った事も懐かしい思い出です。

オーストラリアに住んで十九年

被服学科（大学三回卒）
園部則子
シドニー在住

ハイビスカス、ブーゲンビリアなどの美しい色とりどりの花が一年中咲いているシドニーに移り住んで十九年になる。オーストラリアは色とりどりの花と同じように多くの民族が共生し、たくさんの文化の花が咲き誇っている国でもある。

当然のこと、私自身が多民族・多文化の共生を享受出来るようになるまで長い道のりがあった。世界第2の経済大国・日本の出身という奢り、自身の傲慢さ、他民族・異文化に対する偏見、無関心からなかなかこの国に馴染めなかった。

四年前リストラで職を失ったことをきっかけに、現地での資格を取るため仕事が終わった後、夜学に通い始めた。資格と経験さえあれば、人種、国籍に関係なく将来が開けていく国なので、移民の人たちは現地での資格を取るために真剣だ。特に中国人は助け合いながらよく勉強している。今まで恵まれた環境に甘えていた自分が恥ずかしくなった。

現在、IT関係のアメリカ企業で在庫管理アナリストとして働いている。同じ部署の同僚は、アジアのそれぞれの国の言語を話す人たちとヨーロッパからの移民であるユーゴスラビア人、ギリシャ人などである。

二十一世紀は人種、民族、宗教等に関係なくひとりひとりがかけがえのない人間としてお互いに尊敬されていく時代になっていかなければならない。職場やキャンパスでたくさんの異なる民族がお互いに尊敬し合い、助け合っている姿を見ると嬉しくなりこの国に住んでいることをとても誇りに思う。

追伸

とても懐かしい大学の同窓会からの連絡を大変うれしく拝見いたしました。

おおとり会だよりは毎回大変楽しみに読ませて頂いております。世の中の移り変わりを皆さんがどのように捉えているか等とても興味深く、また読んでいて共感する面も多くあります。それぞれの立場での皆さんのご活躍にはいつも励まされます。しっかりした考えをもって生きている皆さんの思いにふれると静岡女子大の卒業生であることに誇りを感じます。

パラグアイって知ってますか？

食物学科（大学十三回卒）
伊部文代
パラグアイ在住期間
一九八五～一九八七

「南米のパラグアイ」という国名を聞かれても、おそらく、ほとんどのかたは知らない、聞いたこともないという答えが返ってくるのではないでしょうか。よく似た国名にウルグアイという国があります。ウルグアイラウンドなどの言葉で聞いたことがあるかと思います。ウルグアイはヨーロッパの避寒地として、会議など開かれることが多く名前の「グアイ」というのは「大きな水」という意味で、現地語のグアラニー語からきています。パラグアイはウルグアイの国のそばにあります。また、南米というとブラジル、アルゼンチンなどの大国を思い浮かべるかもしれません。パラグアイはその大国に隣接している国です。面積は日本の約一、一倍、人口は三千万人という国です。わたしはその国で青年海外協力隊員として二年間活動してきました。

「どんなところだった」とよく聞かれますが、「三十年前の日本そのものだよ」と答えています。道路はアスファルトのところもあるけれど、まだ舗装されてないところもあり、大きな水たまりがあちらこちらにあります。また、鶏が放し飼いにされて庭をコッコッコッとわがもの顔で歩き回っています。（わたしにとって生きて歩く鶏をみたのはこれが初めてでした。）のどかな、のんびりとした国でした。

活動は農村婦人に生活の糧となる編み物を教えたり、栄養のバランスを考えた食事つくりの指導といったことをしていました。ただ、わたしが住んでいたところはとても田舎で、アスファルトがひかれてなく、雨が降ると道がぬかるんで百メートルむこうのお店まで行くのも大変でした。もちろん活動できるはずもなく、農村婦人のグループが雨が続いていつのまにかなくなってしまったこともありました。また、言葉は、スペイン語が公用語なのですが、田舎のほうでは現地語のグアラニー語が普通の会話で使われていたので行ったときは何を話しているのかさっぱりわかりませんでした。たとえば、買い物で、店の主人に「卵一個頂戴。」とスペイン語で言うと、主人は店員に「この人が卵がほしいといってるので鶏小屋からもっておいで」とすぐにグアラニー語に翻訳して伝えるのです。（店員はスペイン語がわからないのです。）もごもごとした鼻にぬける音が多い言葉でちょっと言い方が違うと、とんでもない意味になり、土地の人はわざと間違えてジョークにつかったりしていました。

いろいろなできごとに驚いたり、怒ったりしましたが、やはり学んだことの多い、ふりかえってみれば楽しい生活でした。

通行止め

水がたまっているように見えますが実際は右から左の方へ流れているのです。すなわち、道が川になってしまっているのです。

総会報告

講演より
瀬名秀明氏
科学と小説の楽しさを語る

代表作の「パラサイト・イヴ」には、ミトコンドリア・細胞など、化学・薬学の用語が飛び交いながら、第2回にして初めてのホラー小説大賞受賞ということで、作者はどんな方だろう?、どんなお話をして下さるだろう?とワクワクしながら出かけました。

NHKテレビ「ようこそ先輩」で母校の西奈小学校で授業をなさった瀬名秀明さんは若くてスラッと長身の明るい清潔な感じの方でした。薬学研究者でもある氏は、日常の、と言っても夜中の研究所が一般の人からすると、とてもコワイところであるということをきっかけとして執筆を始めたということ、実験好き、マンガを描くのが好きな少年であったことなどを交え、スライドを使ってミトコンドリアの講義もして下さり、楽しく充実した講演会でした。(若いお母様方、子育てのヒントもございましたよ!)

瀬名氏は懇親会にもご出席され、気軽に写真に入ったり、著書にサインをしたりして下さいました。和やかな内に会員一同親交をあたため合いました。

国文(短大十六回卒) 山下和子

関西支部

『草薙の丘』の集いからの活動報告

◉二〇〇〇・五・二八
『草薙の丘』の集い(十九名参加)
「からすま」京都ホテルにて
河端先生の講演
「里山の保全について」をきく

◉二〇〇一・三・一八
上條先生を囲んで(有志参加)
京都にて

志田直正先生ご退官

女子短大、女子大、県立大とご指導いただいた志田直正先生の最終講義が、一月三十一日『現代社会とコミュニティ』の演題で行われ、その折に同窓会から花束を贈呈致しました。四月から、静岡英和学院大学副学長ご就任との事です。

剣祭バザー収益金

平成十三年十一月三日、恒例の剣祭が県立大学で行われました。今回も多数の方が、バザー開催にご協力して下さいました。心からお礼申し上げます。

剣祭バザー収益金
三四、三六九円

同窓会費に入れさせて頂きます。

平成12年度収支決算

自 平成12年4月1日
至 平成13年3月31日

収入の部 費用	12年度決算	支出の部 費用	12年度決算
受取利息	314,098円	総会開催費	78,958円
通信費振込	152,000	会報発行費	473,965
雑収入	54,218	会議費	15,010
		事務費	440
		慶弔費	27,010
		はばたき基金	50,000
小計	520,316	小計	645,383
前年度より繰越	13,832,812	次年度への繰越	13,707,745
総計	14,353,128	総計	14,353,128

(繰越金 内訳)

定額貯金	9,492,926円	書籍	138,000円
公社債	3,555,346	テレホンカード	4,620
普通預金	420,976	現金	95,877
		合計	13,707,745

上記のとおり相違ありません。
平成13年5月16日

会計監査 外岡幸子
後藤和江

平成13年度予算(案)

自 平成13年4月1日
至 平成14年3月31日

費目	予算	備考
総会開催費	150,000円	
会報発行費	500,000	
会議費	40,000	
事務費	10,000	
慶弔費	50,000	
予備費(はばたき基金)	250,000	
合計	1,000,000	

秦先生追悼文集発行

平成十三年三月ご逝去の秦先生を偲んで、食物科同窓会から追悼文集が発行されました。残部に限りがありますが、御希望の方は御連絡下さい。

・事務局 大石邦枝

あとがき

会報編集の委員を引き受けたものの未経験で、しかも今回の真面目で重いテーマを前にして初めは途方にくれました。ところがインターネットを駆使してテキパキと作業を進める若い人達の力に支えられて発行にこぎつけることが出来ました。原 都子

谷田の桜も満開になりました。青空の下で、心洗われる瞬間を味わえて幸福です。今回の会報は、広い世界に目を向けてみました。海を越えて各々の道で活躍されている同窓生に、却って活力を頂きました。寄せて頂いた皆様に感謝致します。森 恵美

初めておおとり会だより編集の役に就きました。若輩者故、手を動かすことに専念致しました。鉛筆、消しゴム、赤鉛筆、長線引き、電卓、同窓生名簿、地味ながらも広報必須アイテムだと思いました。後々のご参考までに。 石田 加苗

やさしい先輩方との楽しい編集作業でした。又、原稿の依頼を通して、アメリカに住む懐かしい友の声を電話越しにではありましたが、十八年の時を超えて聞く事ができ、すてきな思いの残る会報作りとなりました。ありがとうございました。 望月嘉栄子